

八俣の大蛇退治

古事記 上卷

さても、須佐之男命は、高天原から追放せられて、出雲国の肥河の河上に在る、鳥髪といふ地に御降りになりました。其の時、箸が其の河上から流れて来たので、須佐之男命は、河上には必ず人が住んで居るに違ひないと御考へになりました。河上の方へ尋ねておいでになりましたところ、老翁と老嫗とが、一人の童女を中に置いて、泣いて居りました。そこで、「御前たちは何者であるか」と御たづねになりました。すと、其の老翁は、「私は、此地の国神で、大山津見神の子でございます

ます。私の名は足名椎と申し、妻の名は手名椎と申し、又娘の名は櫛名田比売と申します」と御答へいたしました。須佐之男命は又、「御前たちの泣いて居るのは、どういふ訳か」と御たづねになりますと、「わたくしの娘は、もと八人有りましたのですが、高志の八俣大蛇といふものが毎年やって来て、取って食つてしまふのでございます。今丁度それが来る時分でありますので、嘆き泣いて居るのでございます」と申し上げました。

須佐之男命は、「其の大蛇は、どんな形態をして居るか」と御尋ねになると、「其の大蛇の眼は真赤な酸醬の様で、一つの胴体に頭が八つ、

尾が八つ有ります。又其の胴体には、苔や檜・杉などが生えて居り、其の長さは、八つの谿、八つの丘にわたる程であり、其の腹を見ると、いつも全体に血が滲み爛れて居ります」と申しました。

其の時、須佐之男命は、其の老翁に対つて、「此れが御前の娘ならば、いつそわたくしに其の娘をくれまいか」と仰せられますと、老翁は、「まことに畏れ多い申し様ではございますけれども、どなた様で居らせられますか、存じ上げませんので」と申しましたので、須佐之男命は、「自分は、天照大御神の御弟である。今、高天原から降つて来たところなのだ」と仰せられました。これをうけたまはつて、足名椎・手名

椎神は、「さやうで居らせられますか。其れならば畏れ入つた次第でございます。ふつつかな娘ながら差上げますでございませう」と御答へをいたしました。

そこで、速須佐之男命は、其の童女を湯津爪櫛に姿形を変へさせて、其れを御自分の御美豆良に御さしになり、其の足名椎・手名椎神に仰せられますのに、「御前たちは、これから八塩折の酒を醸り、又垣を作り廻して、其の垣に八箇所の門口を作り、そして其の門口毎に八つの棧敷を拵へ、其の棧敷毎に酒槽を置いて、其の酒槽には、一つ一つ皆八塩折の酒を入れ置いて、彼の八俣大蛇の来るのを待つて居てく

れよ」と御命じになりました。

二人は、須佐之男命の御命令の通りにして、準備をととのへて待つて居りますと、彼の八俣大蛇は、二人が須佐之男命に申し上げました如くに、果してやつて来ました。そして、酒槽毎に自分の頭を突こんで、其の酒を飲み、酔つて其の場に皆寝てしまひました。そこで須佐之男命は、其の帯びておいでになりました十拳剣を抜いて、其の大蛇をずたずたに御斬りになりましたから、肥河の水は血汐となつて流れました。

さて、其の大蛇の真中の尾を御斬りになりました時に、御佩刀の刃が毀けたので、不審に思し召されて、御佩刀の鋒尖で、其の尾を截り割いて御覧になりましたところ、想ひ懸けもなく、都牟刈之大刀が現れました。須佐之男命はこれを御取りになりました、此れこそ珍異しい物だと思し召して、事情の次第を天照大御神に申し上げて、御献上に相成りました。是れが即ち草薙之大刀と申す大刀であります。